

**3.11を乗り越えて未来へ** これからの学校教育を考える

巻頭特集

2 **それでも「地域の中の学校」であり続ける!** 笹川 正

6 **今、全ての学びを見つめ直すとき** ~これからの学校教育が目指すもの 松尾直博

8 **これからの学校教育**

8 これからの道徳 松尾直博

10 これからの社会科 澤井陽介

12 これからの理科 村山哲哉

14 **未来への応援メッセージ**

14 **インタビュー** 川淵キャプテン

15 **“笑顔の教室”実践報告**

16 **Pray for Smiles** 小巻亜矢

17 **生きる力を育むドリームマップ** 秋田稲美

特 集

# 3.11を 乗り越えて未来へ

## これからの学校教育を考える

東

日本を襲った未曾有の大震災から

もうすぐ一年が経とうとしています。

深い悲しみが簡単に癒えることはありませんが、  
それでもなお、日本は立ち上がろうとしています。

震災を機に、自らの生き方や生活を見直した人も  
多いことでしょう。

日本はこれから“変わっていくべき”ではないか  
という意見も多くあります。

では、どのように日本は変わっていくべきな  
のでしょうか？

そのために学校教育では、どのような取り組みが  
必要となってくるのでしょうか？

簡単に答えの出る問いではありません。

ですが、考える手がかりを得たいと思い、

各分野の先生に伺いました。(編集部)



# 現地レポート



岩手県宮古市

地域が大きな被害を受けながらも、全児童が無事に避難できた<sup>くろ</sup>鉾ヶ崎小学校の校長先生に伺いました。「変わったことは何でしょうか」という編集部の問いに対し、返ってきた答えは、これまでに築いてきた地域との連携から生まれた、「何も変わらない」という力強い言葉でした。

## それでも… 「地域の中の学校」で あり続ける!

岩手県宮古市立 鉾ヶ崎小学校 校長 笹川 正

### 3月11日2時46分 —— そのとき学校では

鉾ヶ崎小学校は、陸中海岸国立公園のほぼ中心に位置する宮古市にある。学区には「浄土ヶ浜」があり、夏は海水浴客でにぎわいを見せる。また、宮古魚市場もあり、秋のサンマ漁、冬のサケ漁でにぎわう町でもある。本校240名の児童の保護者・家族の多くが漁業に従事しており、まさに港町の小学校である。

そんな港町が、3.11の繰り返す津波で、跡形もなくなってしまった。「ここまで津波は来ない」といわれていた、山際に建つ鉾ヶ崎小学校にも、校庭に40cmの高さの津波が来た。

2時46分は、1・2年生は「さようなら」の挨拶をしようとしていたときであり、子ども達は揺れが収まった後、机の下から校庭に避難し、その後、近くの神社に避難することにした。そのときの道筋は、市内一斉避難訓練

日である3月3日に行った訓練と同じであり、大きな混乱はなかった。

その間、いち早く消防士が消防車で学校に乗りつけ、「津波がすぐ来る。」「(高台に通じる)坂道は、車でいっぱいだ。」という情報をくれた。そして誘導もしてくれた。

### 避難先の学校で 先生方と共に一晩過ごす

神社では、雪と寒さを防ぐために社務所を開放してくれた。ろうそくも灯してくれた。

児童を迎えに来た保護者は、「しばらく一緒にいてください。」という願いを受け入れ、津波・揺れが落ち着くまで一緒に境内に残ってくれた。夕方、迎えが来なかった30人程度の児童たちと共に学校にもどり、一晩過ごすことになった。携帯電話が不通で、道が寸断されていたにもかかわらず、翌日の昼までには、ほぼ全員の保護者が迎えに来てくれた。

## 5日後の卒業証書授与式で言われた「ありがとう」の言葉

そして、5日後。まだ余震が続く中、3月16日に卒業証書授与を行った。そこで、あるお母さんから、「6年間めんどろを見てくださってありがとうございます。こんなに大変なことを乗り越えた子ども達は、立派に育ってくれると思います。先生方が助けてくださった命を、これからも一生懸命育てていきます。ありがとうございます。」という「謝辞」をいただいた。

また、卒業証書授与の報道を見た町内会長さんは、ご自身も被災し、家を流失したにもかかわらず、わざわざ来校し、「こんなに大変なとき、よくぞやってくれた。ありがとう、ありがとう。」と涙ながらに感謝の言葉を述べてくださった。

そのときの私の正直な気持ちは、「なぜこんなにも感謝されるのだろう。」であったが、時間の経過とともに、少しずつ「感謝されてもいいんだ。」と思えるようになってきた。と同時に、鉾ヶ崎小学校は、たくさんの保護者や地域の方々に支えていただいている、まさに「地域の中の学校」なんだということを再確認した。

## 鉾ヶ崎で代々取り組んできた“命を守る”津波対策

本校のある鉾ヶ崎には堤防がない。堤防がないのだから、「命を守るには逃げるしかない」。そのため、津波に対する知識と知恵をしっかりと持たせることが大切であるという考えのもと、代々、津波対策に取り組んできている。

家庭での「地震が起きたら、津波が来ると思え」とか、「高台へ逃げろ」という教えをふまえ、本校でも、

- ・年に2回の津波を想定した避難訓練の実施
- ・「津波防災かるた」の作成と活用
- ・宮古工業高校生徒製作の「津波シミュレーション模型」の見学
- ・市教委作成のDVDによる授業
- ・「津波シェルター」の設置
- ・8町内分の「津波避難マップ」の作成(昨年度の作成であり、できあがったら全戸に配布することとしていた)

など、さまざまな取り組みを通して、子ども達に津波対策のための知識と知恵を育んできた。今回の震災時、全校児童が全員、無事避難できたことは、このような取り組みが功を奏したといえる。



▲子ども達が作った「津波防災かるた」や「津波避難マップ」

## 「学習する必然性」から完成していた地域に密着した「海」の授業

何をするにも必然性を感じてこそ、初めて納得し、取り組むことができる。小学校において、「学習する必然性」は、視覚的に確認でき、日常生活を送る“地域との関係”から見出すことが最良であると考えた。

そこで、「津波避難マップ」を作成するときにも、6年生には、8月に船上から銚ヶ崎を見せて、「確かに、ここだけに堤防がない」ことを確認させることから始めた。その後、DVDによる学習をし、町内会長さん方と一緒に避難場所・避難所までの道を歩き、マップを作成した。完成したマップの発表会では、具体的にたくさんの意見をいただき、次の学習をする必然性につながっていった。

他の学年でも、銚ヶ崎地区に住む人たちにとって生活でも仕事でも切り離すことのできない「海」をテーマに掲げた。そして、

5年生：「銚ヶ崎の魅力を発信しよう。～C

Mづくり」銚ヶ崎で働く人々を取材

4年生：1年間を通してホタテの養殖を体験

3年生：浄土ヶ浜で「磯の生物観察」

を行った。その際、この体験活動には、各学年10名以上の地域の方々のご協力をいただき、学習内容の充実を図ることができた。そして、地域を基盤とする教育を完成させることができた。



▲地元の漁業士さんと取り組んだホタテの養殖体験



▲真剣な表情で取り組む児童

## 3.11直後、学校を訪れた漁業士さんの言葉そして、再開ののろしが上がった！

3.11の大震災で、体験活動ができる町がなくなり、人も町を離れた。その結果、本校の教育環境での基盤であった地域との連携が一瞬にして無に帰してしまい、「これからどうしよう。」と思い悩んでしまった。

でも、そんな思いも2日間だけだった。3月13日、養殖体験をお世話してくださっている漁業士さんがわざわざ来校し、玄関先で、「(養殖施設は)全滅したけど、2・3年待てる。また、(養殖体験を)させてやっから。」と言って、足早に立ち去った。

またその後、昨年、5年生がインタビューした寿司屋さんも、酒蔵も、魚市場も再開するらしいという話が聞こえてきた。

“津波で100%たたきのめされたのに、もう再開ののろしを上げる人たちがいる！”

このことを知って、私の腹は決まった。今の状況に臆することなく、「今できること」「今年しかできないこと」を体験させよう。

それは、

6年生：町内で「復旧・復興に向けてがんばっている人たち」を取材する。

5年生：「今回の大震災から学ぶ」ため、町内のたくさんのの方々を取材し、まとめる。

4年生：ホタテ養殖の一部を体験する。



といったことである。

そして、ある町内会長さんから、「別の町に暮らしていても協力はする。」という言葉や、たくさんの方々からのご協力をいただき、「地域の中の学校」としての活動を再開した。

### 3.11以後、学校の役割は変わらない しかし、強くなった地域との連携

震災後、いろいろ思い悩んだし、さまざまなことに配慮し、教育活動を再開したが、その内容は、3.11の前と同じであった。何も変わらなかった。学校の役割は、これまで通り、児童一人ひとりがこれからの人生を自らの手で築きあげることができるように、その土台を確かなものにすることであり、思いやりを持って、たくましく生きる力を育てていくことである、と。つまり、私自身の中では、学校の果たす役割に変化はなかった。

あえて変わったことを一つあげるとすれば、地域との連携が今までより強くなったように思えることである。

今後は、校長である私をはじめ、教師一人ひとりが、地域の一員として、学校と地域の連携を大切に、どこまで愚直に、ひたむきに、児童一人ひとりの教育に向かうことができるか、その姿勢が問われるだけのように思う。

私自身、教職員集団のリーダーの一人として、「事上磨錬」(観念的に考えるだけでなく、実際の行動の中で知識を磨き、人格を錬成すること)を心に、日々精進していくつもりである。

最後に、この度の大震災で被災した本校、及び児童・教職員に対し、多大なるご支援をいただきました皆様に、心より御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

津波のこわさと、これからの取り組み

宮古市立欽ヶ崎小学校 六年二組 黒田達也

ぼくは、津波の学習をする前までは、津波はテレビでしか見たことがなかったし、別に宮古市に来ないだろうとたかをくくっていました。でも今年、チリ地震津波の時に避難をして、初めて津波のこわさを実感しました。その時、家は大丈夫かなあ、友達は大丈夫かなあと心配になり、もし、津波が来たらどうしようとてもこわくなりました。今まで津波というものは、波がただたんに大きくなって来るだけのものとは思っていませんでした。でもぼくの考えは違いました。津波は、一メートルで大人の人まで流されてしまうと知って、すごく驚きました。次にびっくりしたことは、津波の速さです。人間の走る速さが三十六キロでも、海岸を走って津波と同じスピードになるには、秒速約十メートルで走らなければならないということです。ぼくだったら、いっしょに津波と走って一秒くらいで飲みこまれると思います。ぼくには、去年、九十で亡くなったおばあちゃんがありました。そのおばあちゃんも体験者です。聞いた話だと、おばあちゃんが子どものころ、津波はおそるべき速さで、家々を飲みこみ、大事な家族を亡くしたそうです。その話をぼくに泣きながら話してくれました。とてもかわいそうで、津波はぜんこくで、あまりにもひどいと思いました。この身近な体験を聞いて、津波はいつ来るかは分からないけれど、その津波を防ぐ策はあると思います。その一つとして体験談を語り続けて、津波のこわさをみんなに分かってもらって、津波に対する警戒心をもってもらいたいと思います。

津波のこわさをこの自分の心の中にもいつでもしっかりと持って生活していきたいと思います。

# 今、全ての学びを見つめ直すとき

～これからの学校教育が目指すもの

東京学芸大学 准教授  
松尾 直博

## ◆「あたりまえ」から「ありがとう」へ

2011年3月11日、予想もしていなかった規模の大地震と津波が、東日本を襲った。多くの尊い命が失われた。船が、工場が、田畑が失われた。電車が止まった。便利はずの携帯電話が通じない。その後、原子力発電所で爆発が起こり、放射性物質が広範囲にわたって放出された。計画停電が行われた。生活物資の不足も続いた。故郷を離れなければならない人もいる。電気によって支えられていた「あたりまえ」の暮らし。スーパーに行けば、「あたりまえ」にあった豊富な商品。そして今日も明日も明後日も、大切な人と顔を合わせて、あるいは電話やメールを通じて言葉を交わせるという「あたりまえ」の毎日。このような「あたりまえ」は決して「あたりまえ」ではなかったのだ。電気の供給も、抱負な商品の生産や流通も、大切な人との会話も、いろいろな人の努力、工夫、願い、そして運命や偶然の産物であることを我々は忘れていたのかもしれない。

「あたりまえ」の反意語は「有り難い」である。「有り難い」とは「そうあることは難しい」という意味である。それから転じて、感謝を表す「ありがたい」や「ありがとう」という言葉が生まれたのであろう。われわれの周りに「あたりまえ」のことはなく、たくさんの「有り難い」ことに囲まれている。ボランティアが被害の大きかった地域に向

かった。そこでは、「ありがとう」という言葉があふれていた。支援を受けた人々が、ボランティアに言った「ありがとう」という言葉だけではない。ボランティアの多くも、その地域の人に自然に「ありがとう」という言葉を口にしたという。人と出会い、命の尊厳と向き合うとき、人は「有り難い」と思い、どちらがどちらを支援する側ということを超えて、たがいに「ありがとう」と感謝を口にするのであろう。

## ◆ライフのための学びへ

哲学者の西田幾多郎は、「学問は畢竟<sup>ひっきょう</sup>lifeの為なり。lifeが第一等の事なり。lifeなき学問は無用なり」という言葉を残した。Life(ライフ)という英語は、多義的で、「生命」「生活」「人生」という意味を含んでいる。全ての学びは「生命・生活・人生」のためであり、それらに主眼を置き、そのことを考えない学びは意味がないということである。3.11以降の学校教育では、もう一度、全ての学びは「生命・生活・人生」のためであるということを再確認するべきだろう。

「生命」を保つためには、自らの身を守ること、心身の健康を保つことを学ばなければならない。「生活」していくためには、身のまわりのことに自分で対応し、生計を立てることを学ばなければならない。「人生」を作り上げるためには、自分の価値観を見つめ、希望を持ち、自分の物語を編んでいく



ことを学ばなければならない。こうしたことを直接的に学ぶ機会として、災害教育、安全教育、健康教育、キャリア教育、特別活動、総合的な学習の時間、道徳などが考えられる。

基礎的と思われる全ての教科も、「生命・生活・人生」につながっていることを意識したい。伝え合うための言葉を学ぶこと。社会のしくみや歴史を学ぶこと。数理的な処理を学ぶこと。科学的な見方や考え方を学ぶこと。歌や楽器の演奏の楽しみを学ぶこと。ものを作る喜びを学ぶこと。衣食住への実践を通して生活に必要な力を学ぶこと。運動と健康、安全の大切さを学ぶこと。外国語を通じて世界中の人々とつながることを学ぶこと。3.11を経験した今、「生命・生活・人生」のために、これらの学びがいかに大切か感じるであろう。

学校で学ぶことは、単にテストで良い点数を取るためではなく、自分自身の「生命・生活・人生」のためであり、そして世界中の人たちの「生命・生活・人生」のためでもあるのだ。自分の好きなこと、得意なことで、誰かの役に立ちたいと全ての子どもが考えるようになれば、よりよい社会になることは間違いない。そして、学ばば学ぶほど、「生命・生活・人生」は「あたりまえ」に成立しているのではなく、たくさんの「有り難い」ことの積み重ねで成立していることが分かる。「有り難い」今を理解し、感謝しつつ、未来の「有り難い」社会をつくってゆく子どもを育てることが、これからの学校教育の目指すものであろう。

## ◆未来へ

心理学者のデーモンが、ピアジェのところに留学していたときのおもしろいエピソードを紹介している (Damon,2009)。ピ

アジェは発達における「均衡化」についてのセミナーをしていた。ピアジェがある学生に質問した。「君が水の中に落ちたとして、沈まないようにするための最善な方法は何だと思うか？」と。その学生は、答えた。「浮いていること？ 水を踏みつける？ 思いっきり水を蹴って、頭をあげておくこと？」「ちがう！」ピアジェは言った。「ある方向へ、君は泳ぐんだ。前に進むんだ。そうすれば、安定することができる。加えて、どこかにたどりつけるというさらに良い結果を生む可能性だってある。これが発達における『均衡化』だ。前に進むことが安定することであり、決して一か所にとどまろうとすることではない。

これは子どもの発達についてのたとえ話である。人それぞれのペースがある。傷つき、挫けたときには休息も必要だ。それでも、ゆっくりでも未来に向かって進むことができれば、人は安定を取り戻すことができる。未来の自分、未来の学校、未来の町の物語を描き、進んでいくこと。これからの学校教育は、今まで以上に、未来志向であることが求められるだろう。

3.11の後、被災地の大人たちを元気づけたのは、避難所で自主的に働く子どもたちであった。また、全国の子どもたちが街頭募金の呼びかけをし、応援メッセージや支援物資を被災地に送った。こうした子どもたちの活躍を見ると、もっともっと、子どもたちの力を信じ、期待をかけて、任せることも必要なのだと思う。もちろん大人も応援するが、子どもたち自身が未来を描いて、未来をつくっていく機会を増やしていきたい。

文献Damon, W. 2009 *The Path to Purpose: How Young People Find Their Calling in Life*. Free Press.

# ▶人が生きる意味・価値を語り合う

東京学芸大学准教授  
松尾 直博



## ▶▶ はじめに

東日本大震災と向き合う日本人の道徳性は、世界中から賞賛された。日本の道徳教育が積み上げてきたものが、間違っていないことの証明であろう。しかし、今回の震災をはじめとして、日本や世界は様々な困難と向き合っていかなければならない。その中で、学校教育における道徳は、さらにその重要性を増すと思われる。

## ▶▶ 心のケアと道徳

医療の分野では、人間の「痛み」を次の四つに分ける考え方がある。

- ①フィジカル・ペイン（肉体の痛み）体の痛み、頭痛、腹痛など。
- ②ソーシャル・ペイン（社会的な痛み）失業や共同体からの孤立などの社会的不利益。
- ③メンタル・ペイン（精神的な痛み）恐怖、不安、悲しみなど、心理的な辛さ。
- ④スピリチュアル・ペイン（魂の痛み）生きている意味や価値の破壊・喪失。

注目されているのが、④の「魂の痛み」である。「自分は生きている価値がない」「何を大切に生きていけばいいのかわからない」などの「魂の痛み」は人を絶望におとし入れる。反対に、「肉体の痛み」「社会的痛み」「精神的な痛み」が存在したとしても、「魂の痛み」がない、すなわち生きる意味や価値を感じ続けることができれば、人は力強く生きていけると考えられる。

災害によってもこの四つの痛みが引き起

こされる。通常、「心のケア」と言った場合、③の「精神的な痛み」への対応が考えられている。子どもの心のケアについて、いくつかの関係機関がパンフレットなどを出しているが、そこではPTSD(心的外傷後ストレス障害)を始め、ストレス関連の問題の予防と対応について述べられている。しかし、④の「魂の痛み」については、あまり考えられていない。

魂の痛みは、生きる意味や価値の傷つきであり、喪失である。魂の痛みから回復するためには、生きる意味や価値について考え、感じ、語り合うことが重要になる。そうした営みを通じて、意味や価値を取り戻したり、再構成したり、新たに見つけることが鍵となる。震災被害による絶望の時を経て、「故郷のために、前を向いて歩きだそう」「亡くなった大切な人の思いを引き継いでいく」「自分たちが、この町を盛り上げるんだ」など、生きる意味や価値を見つけることにより、立ち上がろうとしている人がたくさんいる。

日本の学校教育において、生きる意味や価値を直接扱うことができるのが、道徳である。道徳の時間の中で、生きる意味や価値について考え、感じ、語り合うこと。これが、魂の痛みを最小限にし、魂の回復を促すために、学校教育ができる重要な役割と言える。被災した子どもがいる場合は、話題や資料は考慮しなければならない。しかし、生きる意味や価値について考え、感じ、語ることが、ストレスの軽減やリラクゼーションとは違った観点からの、「心のケア」であると考えられる。

改めて、学習指導要領に示されている道徳の内容(内容項目)を読んでみよう。「1 主



として自分自身に関すること。」「2 主として他の人とかかわりに関すること。」「3 主として自然や崇高なものとかかわりに関すること。」「4 主として集団や社会とかかわりに関すること。」この4つの視点からまとめられている内容項目に書かれていることは、3.11以降、改めてその大切さに気づかされたことや、現在日本中で議論が続けられている内容だということが実感できるだろう。

## ▶▶ 価値観が関わるテーマについて対話する

3.11以降、電力やエネルギーの問題、復興支援財源の問題、食の安全や放射性物質の影響の問題など、さまざまな議論が巻き起こっている。政治家や科学者だけではなく、一般の人の間でも議論が盛んに行われている。中には、感情的に意見がぶつかり、人間関係がこじれてしまった人もいるだろう。このようなことについての議論は、事実の理解や科学的知識が共有されれば収まるものではない。その人の価値観、生き方が、議論に深く関わっているからである。何を大切に生きていくのか。何を犠牲にできて、何を犠牲にできないのか。とにかく自分や家族を守ることを優先するのか。それとも、全く会ったことのない遠く離れた場所に住む人の幸せも考えるのか。そもそも幸せに生きるとは、どういうことなのか。一人ひとりが、このようなことに関わる価値の自覚を必要とされる。そして、問題によっては、「私は私。あなたはあなたでいいんじゃない」ということでは済まされないものもある。共に生きるもの同士として、何らかの合意を目指さなければならないことも多い。

これからの社会では、価値観が関わるテーマについて対話する力が必要とされる。ある側面では、激しく意見をぶつけ合いながらも、

相互を尊重し、相互理解を試み、考えを深め、可能であれば合意を目指して対話する。価値多様化の時代においては、このような機会がますます増えていくだろう。ここで求められているのは、相手を打ち負かすディベート力ではない。自己の価値を自覚し、それを言葉にして、相手に伝える。相手から投げかけられる価値観を含んだ意見を理解し、自らの価値観と照らし合わせる。そしてまた意見する。自分の価値観を理解してもらい、相手の価値観を理解する努力を続ける。こうしたプロセスの中で、考えを深めていくことが重要である。

道徳の時間の目標は、道徳的価値の自覚及び生き方についての考えを深めることである。したがって、道徳の時間は、価値観が関わるテーマについて対話するための、絶好の機会である。何かを決めるための学級会での話し合いとは違って、道徳の時間の話し合いは、人の生きる価値や意味について、中心的に話題にできる。現在実際に起こっていることについて、子どもが互いの価値観を語ることも重要であろう。しかし、現実には起こっていることは、複雑すぎて、発達途上の子どもたちには、考えたり語ったりすることが難しいことも多い。副読本に掲載されている資料など、道徳の時間用に開発された資料は、発達段階を考慮して、価値について考え、語ることを促す内容や難易度になっているので、効果的に活用していくのがよいだろう。

残念ながら、今のところ我々日本人は、価値観が関わるテーマについて対話するのがあまり得意でないようだ。議論がかみ合わなかったり、黙り込んでしまったり、過度に感情的になりすぎたり、建設的な合意を生み出せなかったりが目立つ。異なる価値観をもつ相手と対話できる子どもたちを育む上でも、道徳の時間の役割はますます重要になると感じている。

# ▶社会科学習はどのように 変わっていくべきか

文部科学省教科調査官  
澤井 陽介



## ▶▶はじめに

東日本を襲った未曾有の大震災をきっかけに、国民全体で「本当に大切なものは何か」をあらためて考え始めている。学校教育においては、生命、自然環境、家族、人と人とのつながりや協力、地域との連携などの大切さなど、さまざまな価値の見つめ直しが求められる。

社会科学習においても、これからを生きる子どもたちにあらためて伝えるべきことがたくさんあると感じる。

## ▶▶「自然災害の防止」を どう学ばせるか

小学校社会科の第5学年の内容には、国土に関する学習の一つとして「自然災害の防止」がある。これは、平成20年に告示された学習指導要領で新たに加えられた内容である。単なる防災安全の学習ではなく、防災安全の視点を加えた国土理解（国土の環境と国民生活との関連の理解）の学習である。近年多く発生する、いわゆるゲリラ豪雨や、東日本大震災以降も続発する自然災害などを見ても、国土の環境を理解した上で自分たちの安全を守るための学習は、これからもますます大切なものになるはずである。

この学習で大切なことは、森林資源の学習と結びつけるなどして、国土のもつ多面性に気付かせることである。国土の多面性とは、私たちに恩恵を与えてくれている豊かさと共に、豊かであるが故に自然災害発生と隣り合わせでもあるという事実のことである。

第5学年の目標に掲げられる「国土に対す

る愛情」は、国土の多面性を理解した上で、それぞれの郷土の自然と「共に生きる」ことを考えることで育つ。被災地の人々の故郷の土地や自然への強い思いは、私たちにあらためてそのことの大切さを教えてくれる。

東日本大震災で約3000人の児童生徒ほぼ全員が無事だった岩手県釜石市の事例も、防災教育の成果は当然のことながら、児童生徒一人ひとりが地域の地理的環境を理解していたことの成果でもある。社会科学習が防災安全に果たす役割の一つには、地理的環境の理解、国土理解があることを念頭に置きたい。

## ▶▶公助、共助、自助を 意識させる

小学校社会科では、「自然災害の防止」以外にも、防災や安全にかかわる内容がある。

### ○第3学年及び第4学年「地域社会における災害及び事故の防止」

実際の授業で取り上げられる災害の多くは火災であるが、学習指導要領解説には、風水害や地震を取り上げる例も示されている。この内容は「関係機関の働き」が中心であったが、新学習指導要領では新たに「関係機関に協力する地域の人々の活動」が加えられた。いわゆる「公助」（行政、関係機関が守る）だけでなく「共助」（住民も協力して自分たちの安全を守る）の姿も見せていこうという意図である。そうした学びを通して、最終的には「自助」（自分の安全は自分で守る）へと児童の意識が向かうことを期待している。

そのほかにも、第5学年「情報化した社会と国民生活とのかかわり」の学習において「防災情報



ネットワーク」を事例として取り上げることや、第6学年「我が国の政治の働き」に関する学習において、「災害復旧の取り組み」を事例として取り上げることがもできる。

これらの防災や安全に関する内容を取り上げる際には、次の2点に目を向けさせることが大切である。

- ①防災や安全のための対策や事業は、さまざまな機関の連携ネットワークにより進められていること。
- ②自分(たち)の安全は自分(たち)で守ることが必要であり、そのためには日頃から地域、災害、安全などに関する情報に関心を高めていくことが大切であること。

## ▶▶ これからの社会科が伝えていくべきこと

上記の2点は、これからの社会科において大切な視点であり、「連携ネットワーク」「自分ごと」というキーワードに置き換えれば、他の内容においても当てはまる。たとえば、

### ○第5学年 農業や水産業に関する学習

いわゆる産業学習である。これまでは、農業や漁業に従事する人々の工夫や努力を中心に学んできた。人の営みや働きを通して社会的事象の意味を学ぶ社会科では、これからも大切な学びである。一方で、第3学年及び第4学年における「地域の生産活動」の学習と棲み分けて、「産業の様子」を見せていくためには、組織的な営みを取り上げていくことも忘れてはならない。

現在、被災地では農業や漁業の再興を図るべく協力的な取り組みが進められている。漁港では、漁業協同組合、行政はもとより、製氷や運送などの会社が力を合わせて、漁船の受け入れ態勢を作っている。もともと農業においても、農業協同組合や農業試験場などの協同的な営みが産業を支えてきている。これが産業における連携ネットワークの視点で

ある。農家や漁師個人の工夫や努力にとどまらずに、連携・協力体制として産業を見せていくことをこれまで以上に考えてみてはどうだろうか。また、養殖漁業にオーナー制度を取り入れ、インターネットを活用して国民参加型で産業復興を進めている地域もある。こういった事例は、産業が国民生活を支える重要な役割を果たしていることを考えさせる教材ともなる。

東日本大震災が発生後、しばらくの間、物流が滞った期間があった。工業がさまざまな工場間の、あるいは物流とのネットワークで営まれているということを実感した人も多いと思う。社会科は社会的事象を関係的にとらえる教科であり、あらためて着目したい視点である。

### ○第3学年及び第4学年 電気の確保に関する学習

飲料水、電気、ガスのうちから選択してライフラインの安定供給について学ぶ内容である。新学習指導要領では、新たに「節水や節電などの資源の有効な利用についても扱うこと」が示された。社会科では、社会における節電の取り組み、たとえば学校や公共施設、会社や工場などで取り組んでいる節電の取り組みを教材化することが必要である。一方で、節電は、利便性優先の価値観を転換する必要が生じることがらでもある。豊かな社会、豊かな生活とは何かということ、あらためて考えるきっかけにもなる。

こういった学習は、大人の宿題を子どもに押しつけているのではない。社会全体で考えていくべき課題として、子どもにも「自分ごと」として考えさせていくことが大切なのである。

このほかにも、震災発生直後には、諸外国からの応援があった。ボランティア活動に参加した外国人も大勢いた。第6学年の「世界の中の日本の役割」に関する学習において、「日本は開発途上国を支援している」という認識だけではなく、「理解し尊重し合い、互いに助け合うことが大切である」ことを今こそ実感できるのではないだろうか。終戦直後の日本が諸外国の支援で再出発したことも思い出して。

# ▶東日本大震災と 理科教育

文部科学省教科調査官

村山 哲哉



## ▶▶はじめに

本年3月に発生した「東日本大震災」により、東北地方を中心とした関東までの広い範囲に、深刻な人的及び物的な被害をもたらされた。また、原子力発電所の事故発生により、環境中への放射性物質の放出が確認され、国民生活に不安を与えている。これらにより、自然現象や科学技術が人々の日常生活に甚大な影響を与え得ることが顕在化した。世界の人々がこの現実を目のあたりにし、自然現象の脅威や科学技術のもつ「光」のみならず「影」の側面も再認識することになったのである。我が国は、まさに今、科学技術と社会の在り方について議論を深め、現代社会における自然現象への対応や科学技術の役割を見つめ直し、新たな行動へつなげていくべき時にある。

## ▶▶東日本大震災において表れた 日本人の強みと弱み

今回の東日本大震災は、理科の内容に関わりが深く、地震、津波、原発問題などは、科学と自然の世界、つまり理科が学習対象としていることである。その中で、繋がり、すなわち、「連鎖性」について深く考えさせられた。地震が発生し、津波という大きな自然災害が起こり、原発の事故になり、その放射線が大気中に広まって、私たちの生活などに甚大な被害を及ぼした。そういうことから、地球上の出来事は、社会現象、自然現象、そして人間関係において「連鎖性」をもっているということを、改めて教訓として

学んだのである。

また、今回の震災に関する出来事において、日本人の強みと弱みが表れていると考える。

「強み」とは、日本人は我慢強いということである。災害が起こっても大きなパニックにならず、みんなじっと我慢していた。その理由として考えられるのは、私たち日本人は、これまで自然に寄り添って生きてきたからである。四季折々の自然現象の変化に応じて、ライフスタイルをつくってきたのである。

一方、「弱み」とは、課題設定能力が弱いことである。私たちは、何か問題があって、それを解決していく力は強いけれども、想定外のことも含めて、自分で課題を設定するという力が弱いのではないかと思っている。頑強な堤防をつくっても、実際にはその想定をはるかに超える津波が発生したのだから…。

そうした課題設定能力を子ども一人一人につけていく必要があり、そのためのポイントが三つあると考えている。

一つめは、シミュレーションする力。課題設定をして、どういうことが繋がり、どういう連鎖が起こるのかを、科学的な立場からシミュレーションすることである。

二つめは、データの扱い。放射線の問題もそうだが、データが何を意味しているのかをしっかりとらえて、データをもとに自分で考えていくという力が今後ますます必要である。

三つめは、絶対ということはないということを知ることである。地球上の出来事で、絶対安心、絶対大丈夫といえることはない。多様な事象が連鎖している状況の中で、判断し、



考えていく力が必要になるのである。

## ▶▶▶ 新しい学習指導要領との関連

今回の一連の出来事と、新学習指導要領の理科の「目標」と「内容」は深く関連する。

理科の「目標」では、冒頭に「自然に親しみ」とあり、文末には「科学的な見方や考え方を養う」とある。つまり、「自然」と「科学」が目標の冒頭と文末に埋めこまれている。これは何を意味するのか。「自然」というのは「自然の事物・現象」を指しており、人間が目で見たり肌で感じたりする具体に相当する。「科学」というのは、人間が思考したり判断したりしながら脳の中に描いていく抽象に相当する。つまり、理科では、自然という具体から最終的には科学的な見方や考え方に高めていくということをねらいとしている。

また、目標の文言に「実感を伴った理解」とある。これは、実際はどうなのか、日常生活ではどうなのかということに、もっと目を向けていくことを目指して、今回の改訂において新しく追加された。

さらに、「自然を愛する心情」という文言も目標に入っている。ここで示す「愛情」には、生物の愛護や生命の尊重ということと、もう一つ、自然への畏敬の念ということも含まれる。これまで、日本人は「自然災害」に寄り添い、克服しながら生きてきたが、その一方で、自然の恐ろしさを感じながら生活している。そうしたことを感じる態度を育てることも、大切なねらいとなっている。

理科の「内容」には、今回の改訂において新設された、第6学年「電気の利用」の学習がある。「電気の利用」では、手回し発電機等を使いながら、自分たちで電気を作ることができることを学ぶ。まさに今回の震災で、私たちは「節電」の重要性を知った。また、自分たちで自然エネルギーなどを利用して電気を

作っていくということが、切実な問題となっている。

もう一つ、震災と関連ある内容として、第6学年「土地のつくりと変化」の学習がある。この中に「火山活動と地震」が入っている。ここで重要なのは、今回の学習指導要領の解説書に明記した「将来にも起こりうる可能性がある」ということである。つまり、自然災害は、過去のことではなく、今のことであり、将来のことであることをしっかりと認識するということの意味している。まさに他人事ではない「自分事」として、自然現象や科学技術をとらえていくことが大切だということである。

## ▶▶▶ これからの理科教育の一つの方向性

今回の一連の出来事を受けて、これからの理科教育の方向性について考えると、一つには、自然現象にもっと子どもたちを近づけていかなければならないということが挙げられる。自然現象と触れ合える場所を意図的に設けて、感覚を通して自然体験なり自然認識を高めることが、小学校児童期にはきわめて重要である。そして、体験や感覚に根ざして推論する力を、環境教育や防災教育と関連させながら育成していくことが大切である。

もう一つは「科学」の扱いである。科学は地球や人類を救うこともあるが、人類を滅ぼす可能性ももっている。これは核の問題で60年代から盛んに議論されてきたことで、原発の問題はまさにそうである。しかし、科学なしに私たち人類の発展はありえないと言っても過言ではない。多様な環境問題を解決していくときにも、科学の力なしでは解決できない問題がたくさんある。そうした意味で、科学の功罪について、教材を通して考えていくことも必要になると考える。

# 東日本大震災 被災地への 応援メッセージ

光文書院が、「子どもの夢」支援事業として、共に活動している2つの団体から、メッセージや被災地に向けた取り組みの紹介をいただきました。

## 応援メッセージ①

日本サッカー協会キャプテン

### 川淵 三郎



被災地の学校に、スポーツ界の著名人を「夢先生」として派遣する「スポーツ笑顔の教室」を行っている川淵キャプテンにお話をうかがいました。

**Q.** 「スポーツ笑顔の教室」には、どのような効果があるとお考えですか？

川淵さん 「スポーツ笑顔の教室」の元となる「JFAこころのプロジェクト」では、延べ9万人の子どもたちに対し、授業を行ってきました。先生になるのは、Jリーガーやなでしこジャパンの選手たちです。

このプロジェクトを始める前には、たった一度の授業で子ども達に何を伝えられるのかという声もありました。しかし、授業で見せる子どもたちの生き生きした表情や手紙の内容などから、子どもたちが選手から大きな刺激を受けていることが分かります。

たとえ、クラスの中のたった一人に対しても、選手の経験や考え方が伝わり、夢に向かっていく力になってほしい。そんな気持ちで臨んでいます。

一方、選手たちも、先生として教壇に立つ前には非常に悩みます。授業前日は眠れないほどです。ですが、終わったあとは、「またやりたい」という選手がほとんどです。それは、子どもたちと触れ合うことで、選手

自身も大きな力をもらうからです。

さまざまな経験を積んで困難を乗り越えてきた選手が、子どもたちと出会い、大きなエネルギーが生まれてきました。それは被災地でも同じだと思います。

**Q.** 実際に被災地を訪れたそうですが、お考えになったことを教えてください。

川淵さん 最初、子どもたちに接するとき、非常に気をつかうあまり、言葉を選んでしまったのです。ですが、ある選手の授業から学んだことがあります。それは、気をつかいすぎて、何も伝わらないよりも、いつも通りに子どもと真正面から向き合うことが大切だということです。子どもたちには受け止める力があります。

震災後、子どもとの接し方にとまどうことも多いと思いますが、大人が自信をもって、子どもたちにメッセージを伝えていくことが大切だと感じました。

**Q.** これからの夢は何でしょうか。

川淵さん 身近にいる大人が、夢をもって生きている姿を、子どもたちに見せたいです。今、派遣しているのは、著名なスポーツ選手が多いのですが、ぜひ、地元の人に先生になってもらい、教壇に立ってほしいですね。

今回の震災でもがんばっている大人がたくさんいると思います。その身近な大人の姿こそが、子どもたちに希望を与えるのではないのでしょうか。

## 実践レポート

### スポーツこころのプロジェクト 「笑顔の教室」第1回レポート

日本サッカー協会 JFA こころのプロジェクト推進室

中原 大

「スポーツこころのプロジェクト笑顔の教室」(スポーツ笑顔の教室)の第1回は、元サッカー日本代表のラモス瑠偉氏が「夢先生」となり、2011年9月21日、岩手県大船渡市の蛸ノ浦小学校6年生19人を対象に行われました。

#### 達成感を味わう～「遊びの時間」～

スポーツ笑顔の教室は、前半45分の「遊びの時間」と後半45分の「対話の時間」で構成されます。

体育館で行う「遊びの時間」では、チームワークを必要とするゲームを通じて、子どもたちに「仲間と協力することの大切さ」や「達成感」を感じてもらいます。また、夢先生と子どもたちが一緒に体を動かすことで、お互いの緊張感を和らげることも目的としています。夢先生とアシスタントの2名体制で臨み、多くの場合、アシスタントがメニューを進行して、夢先生は児童側に入ります。

この日アシスタントを務めたのは、元Jリーガーの安永聡太郎氏。安永氏は、



自身が鬼となり、ラモス氏&児童チームと対戦する鬼ごっこやフラフープを使った陣地取りゲームを行いました。安永氏は、ルールを伝えると、すぐにゲームをスタート。成功できないと、ラモス氏のところに子どもたちを集め、アイデアを出し合わせることで、「協力することの大切さ」を感じてもらいました。最後は、高ぶった気持ちを

抑えるためにクールダウンを行い、「遊びの時間」が終了。休憩をはさんで、教室での「対話の時間」へと移りました。

#### 自分の持つ可能性に気づく～「対話の時間」～

「対話の時間」では、夢先生が自身の経験を語った後、子どもたちに「宝物シート」を記入してもらいます。「宝物シート」の記入欄は「好きなこと」「得意なこと」「やってみたいこと」の3つ。



子どもたちが夢先生の話の聞き、宝物シートを書くことを通じて、自分の持つ可能性に気づくことを狙っています。

ラモス氏は、小さい頃に父親をなくし、生活が激変したことや「プロサッカー選手になって、いつか自分の力で母親に家を買いたい」という夢を持ったこと、来日したときに、文化の違いやサッカーのレベルの違いに苦しんだエピソードなどを披露。その後、子どもたちが宝物シートを記入し、数人が発表しました。

ラモス氏は最後に、「(震災と津波災害という) 厳しい体験をしてつらい状況だが、前向きに生きてほしい。そうすればきっと晴れる日が来る。その日のために、感謝の気持ちを忘れず頑張ることが大事。」と、子どもたちへエールを送り、「笑顔の教室」が終了。子どもたちは、ラモス氏の熱いメッセージに終始、真剣なまなざしで聞き入っていました。





## 今こそ、自分の将来を考える…。

NPO法人 ハロードリーム実行委員会

理事 秋田 稲美



### はじめに

東日本大震災から10か月ほどが経ちました。ご家族や親せき、ご友人が被災された方々に、心からのお見舞いを申し上げます。

また、支援への思いがありながら十分な行動に移せないことからくる無力感や、地震後に起こっている体調の変化を訴える方々に、同じ思いを抱くものとして、深く共感します。自分自身に対しての心のケアを大切にして、まずは自らが健康であることを社会貢献の第一歩と考え、心穏やかであることを心がけましょう。

また、すべての人が心身ともに健康で日々を過ごせる社会づくりに、微力ながら尽力してまいりたいと思います。

### 「ドリームマップづくり」をお勧めするわけ

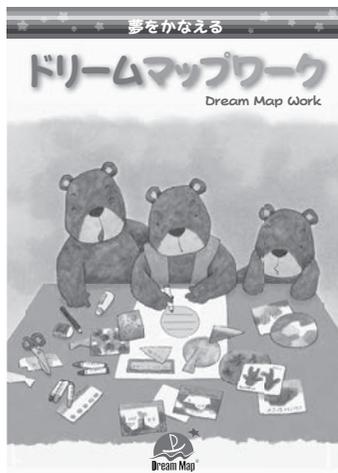
キャリア教育(ドリームマップ授業)では、6時間(1日)かけて小学5～6年生が「自分の将来」に、じっくり向き合います。

特に震災後、子どもが不安がったり、落ち込んだりしているような場合には、「大きくなったなら〇〇になれるといいな」と視線を

将来に向けることで、心も自然と上向いてきます。

私たちは、今までに1万人以上の子どもたちのドリームマップづくりをサポートしてきました。作品を見ると、子どもたちの共通の願いに気づかされます。それは、「平和で安全な毎日を、笑顔で過ごすこと」。

ドリームマップが子どもたちの“夢の実現”の一助になれば、幸いです。



ドリームマップ授業のテキスト  
(編集：光文書院)



### 子どもの生きる力を育む「ドリームマップ」

ドリームマップ授業では、夢がかなった自分を想像し、画用紙に文字や写真や絵で「夢への地図」をつくります。

少し照れながら、「私は(僕は)、将来〇〇になりたい!」と宣言したとき、人生の主役は自分であることに気づき、自ら人生を切り拓く勇気を持つことができます。ドリームマップは、子どもたちの生きるチカラを育みます。

\*「ドリームマップ授業」についてのお問い合わせ  
NPO法人ハロードリーム実行委員会 03-3779-6180